

ラウンドテーブル・2015

ニューズレター

2016. 2. 7

生・労働・運動ネット

富山市神通町 3-5-3

TEL 076-441-7843

FAX 076-444-6093

E-mail:jammers@net-jammers.net

「日本人」としての主体の分裂を「自己解放」への契機に ——「ラウンドテーブル・2015」第3回の論議を改めて振り返る

2015年8月16日（日）の「ラウンドテーブル・2015 『敗戦／戦後70年』：沖縄〈と〉私・たち——『応援』の〈と〉から『応答』の〈と〉へ」の第3回「繰り返し脱『脱植民地化回避』の営みを！私・たちの『ポジショナリティ』を再=審する その2：『沖縄ノート』から『日本国民としての責任』を考える」では、「沖縄をめぐる社会運動/論/史へ向けて」の後半部を主なテキストとして、ヤマトの私・たちの沖縄に対する「ポジショナリティ」を改めて捉え直すことを試みました。以下、第3回の集いでの報告のアウトラインを紹介します。

I. 二重の「ポストコロニアル」状況への「応答」としての「沖縄ノート」

1. 沖縄の「拒絶の声」による自己の分裂・亀裂化の確認

今日の報告では、大野光明さんの論文「沖縄をめぐる社会運動/論/史へ向けて——大江健三郎『沖縄ノート』における2つのポストコロニアリティ」の後半での大江健三郎の「沖縄ノート」をめぐる論議を素材として、ヤマトの私・たちの沖縄に対する「ポジショナリティ」という問題を、これまでとは少し違った視点から考え合うことを試みたい。

大江健三郎の「沖縄ノート」（1970年）では、異議申し立てを行う「詩人」（新川明）や、後に「人類館」の上演で有名になった劇団「創造」のメンバーといった大江と同世代の沖縄の人々との出会いや、沖縄の米軍基地労働者のストライキ等の当時の出来事を報告している。そうした報告を通じて、大江は、「琉球処分」から、「沖縄戦」、敗戦後の沖縄の日本国家からの「分離」とその後の欺瞞的な「祖国復帰」への回収までの近代日本国家の歴史を貫くヤマトの沖縄への暴力の構造を直視しようとしている。同時に、「日本人」である大江に対する沖縄の人々の「拒絶の声」を絶えず認識することを通じて、「日本人」としての主体の分裂・亀裂化を自己確認することが、「沖縄ノート」の主要なテーマになっている。

「僕はかれらをなお深く知るために沖縄へ行こうとする、しかしかれらをより深く知ることとは、かれらが優しく、かつ確固として僕を拒絶していることを、絶望的なほどにも認識することなのだ。[...]ただ熱病によって衰弱しつつもなお駆りたてられるような状態で、日本人とはなにか、このような日本人ではないと

ころの日本人へと自分をかえることはできないか、と思いつめて走り廻っているのだ。」(「沖縄ノート」p15)

2. 日本国家の二重の「ポストコロニアル」状況はいかに捉えられたのか

□「日本は沖縄に属する」——日本国家の〈主権〉・〈自立〉を根底から問う

「沖縄ノート」で、大江は、「植民地的意識」に基づく日本の沖縄に対する加害への無自覚を何度も問いかけ続けながら、そうした問いかけをさらに超えて、「冷戦体制」下でのヤマトと沖縄を同時に貫く構造を透視しようとしている。例えば、米軍による沖縄の「核基地」化の黙認・容認によって日本がアメリカの軍事覇権主義に荷担することで、逆に戦後日本国家自身が自ら切り離しつつ「潜在主権」のロジックによってつなぎ止めてきた「核基地」沖縄の一部と化している状態を、「沖縄ノート」では、「沖縄が日本に属するのではなく、日本が沖縄に属する」という言葉で表現している。

「日本は沖縄に属する」ということの意味は、以下のようなエピソードから、より明らかに示されているように思う。そのエピソードでは、日本「本土」側の「自立」・「平和」自体が、沖縄を通じて日本全体がアメリカの軍事戦略に深く組み込まれている状態の、いわば「余白」・「隙間」としてのみ成立していることが暗示されている。

「僕はかつてアメリカで、核戦略の専門家と話していた時の奇妙なエピソードを思い出す。彼は鉛筆で極東の地図を描いたが、その地図において日本列島は、沖縄の十分の一にもみたくない小さなさなのだ。考えてみれば核戦略家の頭のなかで、それはまことに自然な地図の形であったにちがいない」(同上p33)

□「自立」に向けた契機としての「日本の孤島苦」の認識

また、「沖縄ノート」で興味深く感じるのは、長らく「忘れられた島」であった沖縄に向けられてきた「孤島苦」という言葉を、大江は、「日本の孤島苦」として、「本土」側のあり方を指し示すものとして反転させて使用していることだ。大江が沖縄で出会った「アジアにおいて沖縄と沖縄の人間とはなにかを考へつつ行動をつみかさねる人々」とは対照的に、アメリカの軍事覇権主義への荷担によって帝国時代の「侵略精神」や「中華思想」的感覚を温存することで、アジアの中で自閉的な状態にあることに無自覚な「本土」側の精神状態を、大江は、「日本の孤島苦」という言葉で表現している。同時に、「沖縄ノート」では、沖縄の人々の「自立」の経験と思想との出会い・発見を通じて、そうした「日本の孤島苦」を日本の私・たちが深く自覚し、そうした自閉的な精神状態を自ら解体することが、日本人自身の「自立」への契機となりうるのではないか、ということが示唆されているように思う。

「それでは日本人とはなにか、と考える時、[...]僕はただちに自分が、日本の孤島苦とでもいうものを、アジア全域にかかわる規模で、本当につきつめて考えたことがあるのか、というにがい疑いにつきあたらずにはいない。[...]政府はいざしらず、すくなくとも本土の革新勢力は、復帰してくる沖縄とそこに生き延びる人々の「自立」の経験と思想とを、自分のわきばらにつきつけられた鈍器のようにながれがたくしたたかに発見することから、あらためてのアジア認識を始めなければならないだろう」(「沖縄ノート」p130-131)

3. 「沖縄ノート」の〈問い〉の向かう先は？

沖縄に対する国民主義的な「同胞意識」を疑うことないまま、「本土」の「良心的」な知識人の多くが沖縄との「民族的連帯」を謳い、一部の急進的な新左翼党派さえも、アメリカ帝国主義からの沖縄「奪還」を

政治的スローガンとするような時代状況の中で、自分自身が「日本人」であることの矛盾と亀裂の認識から沖縄への「応答」を模索した貴重な思索的営為として、大野論文では大江の「沖縄ノート」を捉えている。その一方で、「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という大江の〈問い〉の中の「このような日本人ではないところの日本人」は、「現在も継続されている東アジアの「冷戦」システムへの対抗的主体なのか」、それとも、「結局は暴力装置としての国家を維持・再生産するナショナルな主体へと回収され行く道なのか」という問いかけを、大野論文は投げかけている。

大野論文では、大江がそうした自問を繰り返し続けた後で、「僕はあらためて、「本土」という言葉の実体を、積極的に把握したいとねがう」と言っていることに対して、「大江の論理・認識自体が国家への回収の論理を取っている」と批判的に捉えている。その一方で、「(大江が) 沖縄に対する植民地主義的暴力を考えることを原動力として、米国やアジアに対する日本の自立を通じた、アジアと日本との新たな関係性の構築へと跳躍しよう」としていると大江の模索を高く評価している。そのように、「沖縄ノート」での大江の〈問い〉が向かう先が「東アジアの「冷戦」システムへの対抗的主体」か、それとも、「国家を維持・再生産するナショナルな主体」かという問いかけは、結局、大野論文では「未解決」のままになっているように思う。

Ⅱ. 沖縄はいかにして聞かれ得るか

1. 金光翔「日本国民としての責任」論から大江の〈問い〉を考える

そのような大江の〈問い〉の向かう先を考えるための一つの手がかりとして、金光翔（キム・グァンサ）の論文「大江健三郎の「日本国民としての責任」論——沖縄問題について」（「私にも話させて」ブログ所収）を取り上げたい。哲学者で「戦後補償問題」にも深く関わっている高橋哲哉の「戦後責任論」では、「この責任（「日本人としての戦後責任」）は、戦後責任をきちんと果たしてこなかった日本国家が、戦後責任をきちんと果たすように日本国家のあり方を変えて」いき、「侵略戦争や植民地支配を可能にしたこの社会のあり方を根本から克服し、日本を『日本とは別のもの』に開かれた『別の日本』に変革していくことにほかならない」と述べられている。金論文は、大江の〈問い〉と高橋哲哉の「戦後責任論」との近接性に触れて、こうした「日本人としての戦後責任論」は、「ある時期から、「右」（対米従属論的リベラル派を含む）と「左」（「ポストコロニアル」な「国民主義」批判論者）から攻撃を受けて、論壇からはほぼ消滅」と分析している。

金論文では、一見、大江の「可能性」を救い出しているように見えながら、実際には大江の「可能性」を殺す言説として、歴史学者の成田龍一の「大江論」を批判的に紹介している。成田は、「(大江は)「沖縄の文化の多様な側面」に触発されたというが、沖縄での大江の体験は、大江にとっての「もうひとつの日本」の発見であった」と述べている。そのように、成田は、もっぱら日本国内の（文化的）多様性を認識し、単一的な主体としての「日本人」という概念を問うという「国民主義」批判として、大江の〈問い〉を捉えている。しかし、「戦後においても、憲法から切り離されている沖縄の犠牲のもとに、本土の平和と繁栄が築きあげられてきたことに、本土の日本人は、それをよく認識していない」という大江自身の発言から、大江は、沖縄について「日本国民」としての歴史的責任の問題として考えていることは明らかではなはずだ。

そのように、成田龍一は、歴史的責任という問題には一切触れず、大江の〈問い〉を「国民主義」を解体して複合的なアイデンティティを志向（「ナショナリティの脱構築」）するものと解釈しているが、金論文は、そうしたリベラル派の「ポストコロニアル」な知識人による「国民主義」批判が結局、「日本人としての戦後責任論」を不問に付していることを、厳しく批判している。

2. 完結なきプロセスとしての「沖縄を聞くこと」——新城郁夫の「沖縄ノート」論を手がかりに

大江の〈問い〉をめぐって考えるためのもう一つの手がかりとして、新城郁夫の「沖縄を聞く」（岩波書店・2010年）中の同名の論文の「沖縄ノート」をめぐる論議を紹介したい。新城論文では、大江の「沖縄ノート」の最後には書きつけられた「どのようにして自分の内部の沖縄ノートに完結の手だてがあろう？」という一節を引用して、「その言葉を読む者に沖縄を聞くための心身の変成を促していく」ことで、「沖縄は、それを聞き取ってしまった者のなかに不意に現れつづける」と述べている。そのような意味で、「このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という大江の〈問い〉は、その先がどこに向かうかというよりも、むしろ、「沖縄を聞く」ことで「聞き取ってしまった者のなかに不意に現れつづける沖縄」に向かい続けるという「完結の手だて」のないプロセスとしてのみあるものだろう。

「沖縄ノート」の最後に、大江がポータブル・ラジオで「沖縄全軍労が第三波ストライキを回避」というニュースを聞く、というエピソードがある。大江は、そのニュースを聞きながら、「あの暗く荒あらしい雨風のうちなる集会とピケ、上原全軍労委員長とその周辺の人々の風貌と声、それをこえてデモの列につらなるまことに様ざまな多数の顔」を想記して、「かれらは屈服しない」、「沖縄の人間としてのかれら自身は、真に人間的に生きることで執拗に抵抗しつづけるであろう」と大江は宣言している。そのように、大江は、そのニュースでは報じられない「デモの列につらなるまことに様ざまな多数の顔」を想記することで、ニュースの背後にある「ここでまたひとつ沖縄問題は終わった」という〈声〉を聞くことを、断固として拒否している。

「沖縄ノート」で、大江は、沖縄に生きる者への不条理な暴力に対する「怒りの共有」のためには、「大江は何にも先んじて日本人であらねばならず、しかし、同時に日本人であるという自明性から追い立てられる」という矛盾や存在の分裂を、「優しく、かつ確固として僕を拒絶」する沖縄の人々の〈声〉を聞くことで受け止めようとしている。そうした堂々巡りの果てに開かれる・拓かれる、ニュースの中の「かれら」を超えた、「真に人間的に生きることで執拗に抵抗しつづける」すべての者へ向けられた呼びかけや想像力のあり方を、この「エピソード」は示唆している。

日本の「戦争責任」・「戦後責任」は、「[ナショナリティの脱構築] などではなく、「大江のように「日本人」であることを直視することでしか解けない」とする金論文の指摘は、私・たちとしても真摯に受け止めるべきものだ。しかし、そのように、大江の〈問い〉を高橋哲哉のような「日本国民としての責任」論としてだけ捉えることは、自らが「日本人」であることの矛盾や自己分裂に向き合うことを通じて、「このような日本人ではないところの日本人」へと向かおうとした大江の模索が孕む自己解放的な契機を、かえって捉え損なうことになるのではないか。

以上、述べてきたように、大野論文では、戦後日本国家の二重の「ポストコロニアル」状況の中での私・たちヤマトの側の「ポジショナリティ」を問う貴重な思索的営為として大江の「沖縄ノート」を取り上げているが、そのことの意義を更に明らかにしたいという思いから、「沖縄ノート」をめぐる金論文と新城論文の論議を紹介した。沖縄に巨大な「負」を強要することで「本土」の側が享受してきた「平和」自体を現政権が破壊しようとする状況の中で、アジアの中で自閉的なあり方を続ける日本の「孤島苦」や、「沖縄が日本に属するのではなく、日本が沖縄に属する」といった「沖縄ノート」での大江の洞察は、現在も古びてはいない。とりわけ、新城論文が指摘するように、大江が、「このような日本人ではないところの日本人」への模索の果てに、「真に人間的に生きることで執拗に抵抗しつづける」すべての者へ向けられた呼びかけや想像力のあり方を描いていることは、戦後の〈向こう〉へと突き進もうとする沖縄の「ピープル」とヤマトの私・たちがいかに「応答」するかを考え合う際の手がかりとなるものように思う。